

愚考考古学⑥

リーフデ号漂着地指夫

佐志生への疑問

中 林 幸 夫

(会員・佐伯市長島町)

本誌第一四八号及び第一四九号に掲載された村井強氏宮下良明氏の記事を楽しく拝読して、両氏の研究の深さに感銘を受け、佐伯の指夫漂着説が、臼杵佐志生漂着説よりも、はるかに真実性があるように思っていたが、その後TOSテレビが、佐伯・臼杵説を解説したのを見て改めて漂着地への疑問を感じさせられた。

そこで、漂着地名とされている豊後の「X A T I V A I」について、一言愚考を述べてみたい。

私は、過去に外国暗号の解説に従事したことがあるので、暗号解読の手法で考えると、

X A T I V A Iは、X A・T I・V A Iに分解される。

一音目のX Aは、子音Xと母音Aとの組合せであり、日本語的には正確な発音がなく、また、母音Aも、ア・

エ・オといろいろ変化して使用される。

子音Xは、アルファベットの第二十四字に位置するく

らいで、本来、発音的には使用されることが少ないもので、日本語で、しいて発音すれば、Xはザ行・ザ行・カ行・ガ行の子音に位置し、母音A（ア・エ・オ）と組合せると、X Aは

サ行の サ セ ソ

ザ行の ザ ゼ ズ

カ行の カ ケ コ

ガ行の ガ ゲ ゴ

である。

二音目のT Iは、子音Tと母音Iとの組合せであり、Tは、現在一般に使用されているタ行であり、T Iはチの発音である。

そして、三音目のV A Iは、子音Vと、母音A Iの組

合せて、Vはバ行の子音であるから、これを組合せると
バイ・ベイ・ボイとなる。

このようにして分解された三音を組合せる「指夫（サ
シブ）」「佐志生（サシウ）」と読むには、二音・三音
目に無理があるように思える。

それから、「指夫」「佐志生」の現在の地名の由来や
発生年代の来歴は知らないが、豊後のX A T I V A Iと
書かれているのであるから、「指夫」「佐志生」よりは
もう少し時代的にも説明のつく著名な地名ではないのだ
ろうか。

そこで、先に分解した三音を組合せると、

コチバイ コチベイ ゴチバイ

サチバイ サチベイ ザチバイ

との組合せがあり、この中のゴチバイ（コチベイ）が、
豊後沿岸の地図を探すと結びつくものがある。それは、
現在の蒲江町の元猿一帯の湾を地元の人々は、今でもゴ
ーチと呼んでいるからである。

ゴーチ、即ち河内である。

そうすれば、三音目のバイ（ベイ）の問題であるが、
外国の船員等は、港（ポート）でない小湾や入江は、普

通、英語のベイ（B A Y）を使っていることに気がつく。
これらのことを組合せて考えると、ゴーチバイは河内
湾となり、蒲江町の河内湾は古い地図にも現在の地図に
も記載されており、X A T I V A Iに関しては、一番近
い発音の地名になる。

バイの発音には、日本語の（バエ）・（バエ）が
あり、これを「バイ」とも呼び、「暗礁」のことである。
大分県南部沿岸海域には、ソコバエ・フタバエ等と呼ぶ
所が十箇所あり、その中に幸（サチ）バエと呼ぶのも
あるが、これはあまりにも小さく、地名として外国人に
聞かれて答える地名ではない。

村井氏が指摘しているように、自航能力を失ったリー
フデ号が、四月十九日、北緯三十二度三十分で日本を発
見し、漂流に近い状態で黒潮に乗り、北上航海したと推
測すれば、漂着地は鶴御崎以南の蒲江辺りが妥当性があ
りそうに思える。

また、リーフデ号が漂着地に通訳として耶蘇会のパー
ドレが来たことについて考えると、一五八七年、大友宗
麟が病没し、宣教師等はほとんど豊後を去っており、リ
ーフデ号漂着の一六〇〇年には、豊後の主要な地域には

最早宣教師・修道士（女）はいなかったと思われる。

それでは、漂着時には何処から通訳が出来る人が来たかという問題になるが、先日、宇目町重岡に足をのびし確認した処、重岡に残存するキリシタン墓（大分で最大のもの）に眠る死者の年代が一六二〇年となっており、もし、この人物等が来たとすれば問題は解決する。

それに重岡から蒲江までの道程の問題であるが、北浦町を流れる天ヶ内川・下塚川の岸伝いの道を行けば、蒲江まではさほどの難所もなく行くことが出来る。

蒲江に行く途中、峠から沖を見れば、そこは太平洋。

異国の船が漂着するにはふさわしい景色が続く。

当時、蒲江は太田一吉の領土でもあり、その後も蒲江町の海岸に中国船が漂着した記録がある。

以上は、私の私見で根拠は薄いかもしれないが、村井氏等の説に結びつくものがあるかもしれないと思い、あえて愚考を述べた次第である。

表紙解説

唐子童子（からごどうじ）

大正から昭和の初期にかけて別府市を中心に活躍した、石造彫刻家岩井大眠氏（いわいたいみん）の力作。別府市流川の繁華街その一角に立って変わりゆく街、人情、ずいぶんと自分勝手になったものだと苦笑いをしている。

童髪、頭上や左右に毛を残して剃る、江戸時代おもに女兒の髪風で前髪を残すときは、前髪童子といった。

写真並びに説明

軸丸 勇